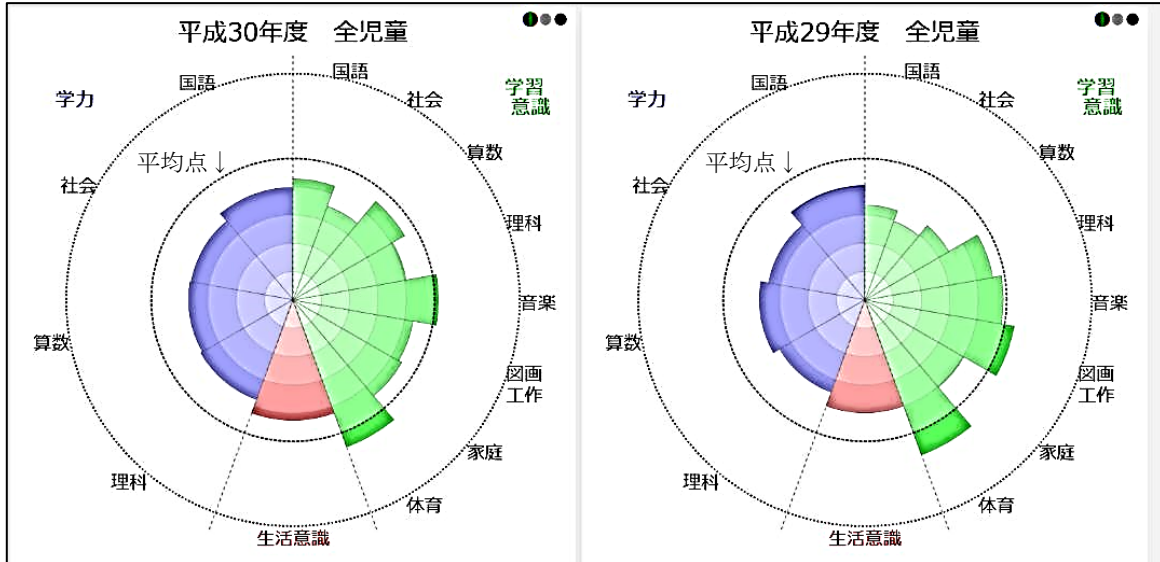


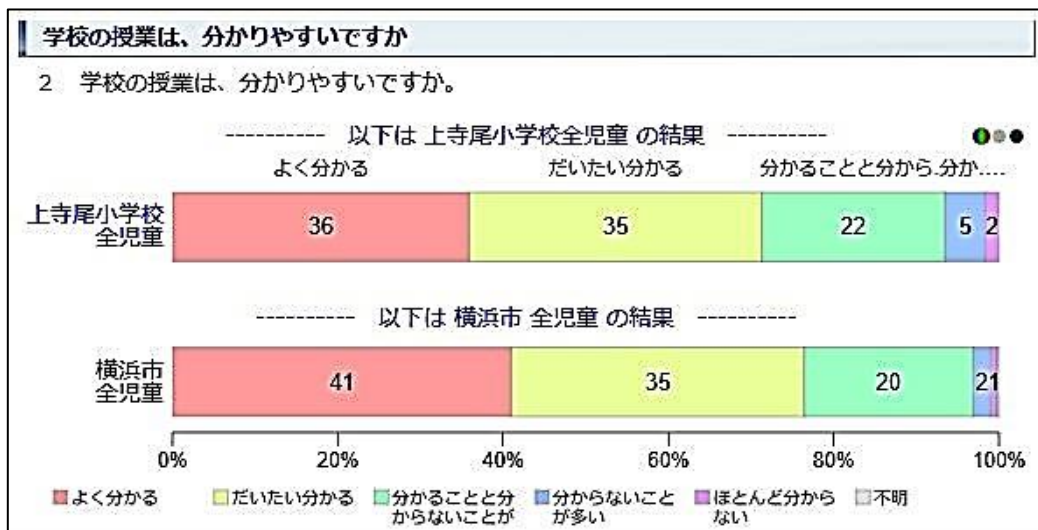
平成30年度 学力・学習状況調査の結果

○ 学力・学習意識・生活意識分析チャートから



学力は、全体的に市の平均より低い状況にあり、学習内容の定着が十分ではありません。学習意欲も学習意識や生活意識についても、昨年度よりも高まってきてはいるものの、依然として平均値をやや下回っており、学習意識の低さがうかがえます。教科に関わらず、学力・学習意識の全体的な底上げが本校の課題として認められます。

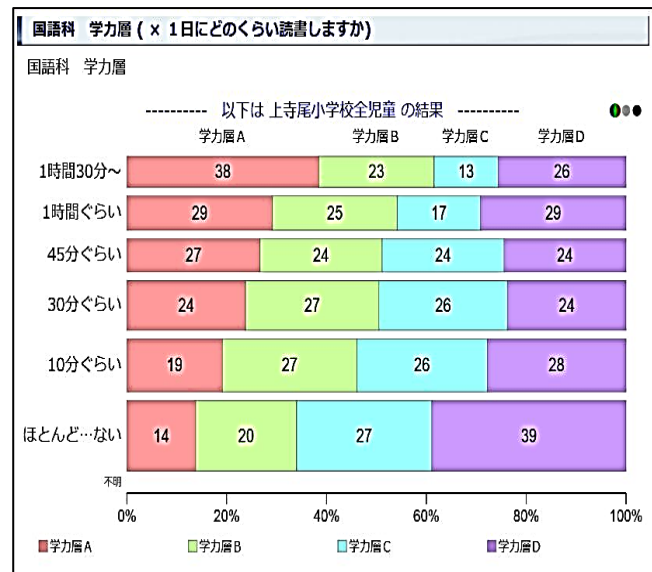
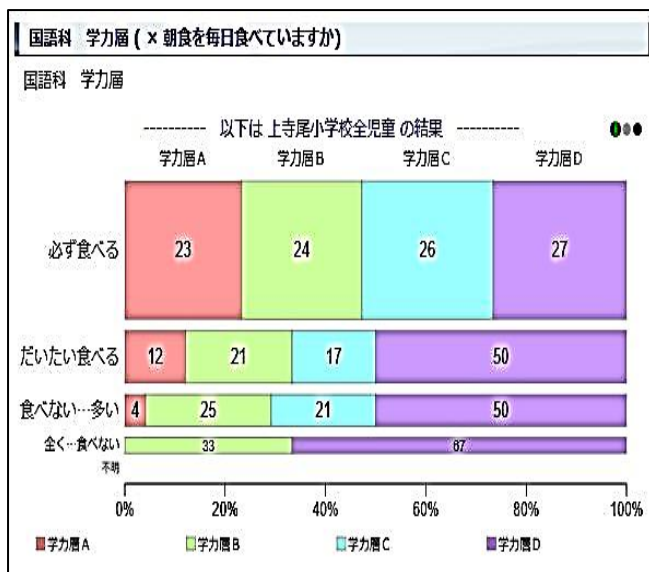
○ 学力向上に向けた視点



授業については、およそ70%の児童が「分かる・だいたい分かる」と答えています。

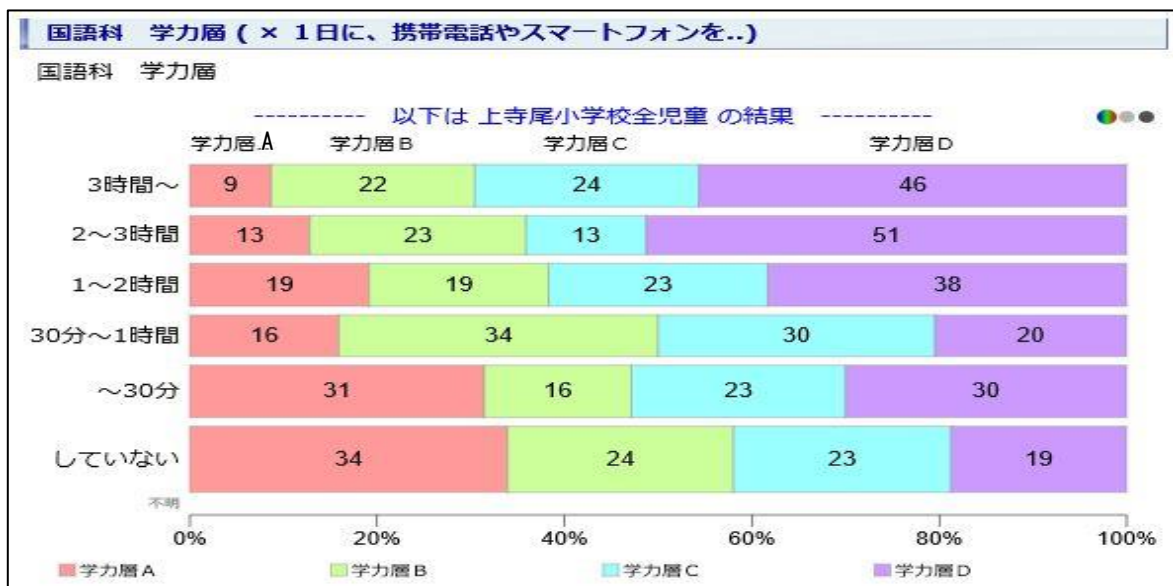
学力の向上に向けた取り組みとして、まず、より分かりやすい授業になるよう活動内容を工夫していくとともに、学んだことを知識として定着させるための手だてが必要と考えます。具体的には、記録（ノート、プリント）の取り方や自主学習の習慣化、身に付けた知識を活用する場面の設定など、授業以外での学習の質と量の向上に向けた取り組みを重視していきます。

○ 学力層（※）ごとの生活意識との比較分析



※学力層・・・児童数を正答率で四分割したもの (例) 学力層 A → 正答率上位の 25%

学力層※と生活意識との相関関係をみると、朝食や読書量について、学力層との正の相関関係が認められました。朝食については、朝食をとることそれ自体ではなく、規則正しい生活を送れているかどうかの一つの指標として考えています。食事と睡眠を規則正しくとることで、学校生活への活力や授業中の集中力を維持することが期待できます。また読書は、読解力の向上のみならず、語彙力や知識量の向上や好奇心を刺激することなど、学力の素地を養うことに効果的です。このような要因から、朝食の有無や読書量が学力に影響を及ぼしていると推察します。そこで学校では、児童の生活意識にも目を向けて、より効果的な学習が実施できるよう保護者のご協力をいただきながら、手だてを講じていきたいと思ひます。



一方で、スマートフォンやテレビゲームの利用時間については、学力層との負の相関関係が認められました。スマートフォン等は依存性が高く、生活習慣の乱れや物事への興味関心の喪失など、学齢期の児童に対する様々な懸念が指摘されています。学校では、ネットいじめや依存症のみならず、学力の向上という視点からもスマートフォンやゲームの適切な利用について、啓発していきたいと思ひます。